

目的 日本の服飾は、諸外国の影響を受けつつ今日に至っており、奈良時代における中国服飾の模倣については周知の通りである。今回、現在の女子装束にみられる裳の祖型ともされる古代の女子の裳について、唐墓壁画を中心に形、着装等の検討を試みた。

方法 唐墓壁画、正倉院の遺品等についての文献資料により考察した。

結果 日本の女子服飾における裳については、古墳時代後期の人物埴輪の衣裳を初めとして、奈良時代には中国の随、唐の服飾に倣ったと思われる裳姿が散見される。すなわち、正倉院の遺品、天壽園繡帳、吉祥天画像、塑像、高松塚古墳の壁画等々によって知ることができるとは不明の点も少なくない。今回、群馬県立歴史博物館の唐墓壁画展の模写作品の中に幾つかの知見を得た。胸高に裳をまとい、裳のものと思われるひもを前方で垂らしたものの、または、袴が垂らした姿の中には韓国の裳(ちま)に類似のものもみられる。また、裳を着ける高さは胸部、胴部と一様ではない。ひもの袴が方にも特徴がみとめられた。